

日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 36 2009 (平成 21 年度) No. 2 平成 22 年 3 月 31 日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局
〒 161-8539 東京都新宿区中落合 4-31-1 目白大学内 TEL：03-5996-3166 FAX：03-5996-3125
E-mail：kokusai@mejiro.ac.jp Website：http://www.kokusairikai.com

目次

巻頭の言葉 学会長挨拶	1	国際理解教育研究会・名古屋研修会の報告	8
第20回大会実行委員長挨拶	2	国際理解教育研究会・東京研修会の報告	9
第20回大会のご案内	3	全国各地の研究会からの報告	10
第20回大会シンポジウム	4	理事会(各委員会等)報告	11
第20回大会特定課題研究	4	会員だより	12
第20回大会自由研究の発表者と題名	5	お知らせ(これからの行事/イベント案内)	15
韓国国際理解教育学会の報告	7	事務局通信	16

巻頭の言葉



学会を支える ～国際理解教育学会の回顧と展望～

学会長 多田 孝志

学会大会開催 20 周年記念誌が、本年 7 月に刊行される。その中で「序章 日本国際理解教育学会の回顧と展望」の執筆を担当した。このため、創刊以来の学会紀要、ニューズレター、科学研究費報告書等の刊行物を再読した。

創設期の活動を概観するとき、気づかされるのは、当時の学会の活動の中心となっていた天城勲、川端末人、中島章夫、中西晃、天野正治、新井郁男、鳥久代、千葉果弘、樋口信也、柿沼利昭、河内徳子、星村平和、米田伸次(敬称略)など、後に第一世代と呼ばれる方々の研究者としての裾野の広さであった。多様な論考を読むと論述を支える学識・知見の豊かさに圧倒される。

日本国際理解教育学会は、希望ある未来社会の担い手の育成のための教育の理論・実践研究を使命とした学会である。未来指向性は学会の特質ともいえる。そうであるからこそ、第一世代の人々が示したように理論・実践を支えている土壌を豊かにすることに意を注ぐ必要を感じる。時代の先端をいく教育研究を追究しつつ、常に教育現場の現実、青少年の実態に視点をおき、またそれぞれの専門分野の探究にも留意したい。

さて、現体制となって、早くも 3 年が過ぎようとしている。この 3 年間の活動を若干振り返ってみたい。

北海道教育大学・富山大学・同志社女子大学における研究大会の開催、研究紀要の刊行、プロジェクト方式による研究活動の展開、国立民族学博物館との共同研究、全国各地で開催された実践研修会、日韓中の共同研究等々の諸活動を顧みるとき、多くの会員たちの参加と支えがあったことを改めて知る思いがする。

本ニューズレターは年間 2 回、3 年間で 6 回発行された。この編集に殆ど一人で携わってきたのは田尻信壹氏であった。また、ホームページを担当し、最新の情報を提示してきたのは今田晃一氏であった。その尽力に深甚なる謝意を表したい。そして、身内ではあるが、煩雑な学会事務を処理・対応してきた目白大学のスタッフの支えに感謝の思いを伝えたい。

2010 年 7 月 3 日(土)・4 日(日)、聖心女子大学において第 20 回大会(永田佳之実行委員長)が開催される。本大会では、「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」をテーマに特定課題研究がおこなわれる。また第 20 回

大会を記念して「日本国際理解教育学会の到達点と展望」を掲げ、「理論と実践をつなぐ」「学校と外部をつなぐ」「国際理解の学習領域をつなぐ」の3つのテーマのシンポジウムが開催される。これらの企画は学会の3年間の研究・実践活動の集大成ともいえる。

いま、学会の諸活動に、多様克つ優れた学識、貴重な体

験を持つ人々が次々と参加し始めている。このことに、学会の新たな時代への胎動を感じる。

教育の大転換期を迎え、本学会が果たすべき役割は、益々重要になってきた。学会のさまざまな活動に、多くの会員が、主体的に参加され、相互に啓発し合い、国際理解教育が、さらに、拡充していくことを願ってやまない。

第20回大会実行委員長の挨拶

〈聖心スピリット〉をもって皆さまをお迎えします

聖心女子大学 永田 佳之

日本国際理解教育学会は、本年、20回目の記念すべき研究大会を開催します。この節目の大会を聖心女子大学でお引き受けすることになりました。これまでの大会のよさから学びつつ、「聖心」らしい心のこもった大会運営ができるよう現在、準備をさせていただいているところです。

聖心女子大学は1948年、日本における最初の新制女子大学のひとつとして誕生しました。その設立母体である教育修道会の聖心会は1800年にフランスのアミアンに誕生して以来、42カ国に広がり、170校にも及ぶ姉妹校が交流をはかっています。キャンパス内には修道院が点在し、シスター達が日々、祈りを捧げる聖堂も学内にあります。

このような系譜上にある大学の現代的な教育目標は「地球を共有する人類の一員として世界を視(み)、人々と交わり、そしてこれらの重要な関心事に自ら関わることのできる広い視野、感受性、柔軟性および実践的な行動力を持つ人間を育成する」ことです。そうした感性と行動力をはぐくむ基盤としての「聖心スピリット」を60年以上、醸成してきたキャンパスで国際理解教育に取り組んでおられる内外のお客様をお迎えし、国際理解にも通じる校風に触れていただける機会をもてることは、私どもにとってこの上ない喜びです。

聖心女子大学のある広尾は国際色豊かな街であると言われています。江戸時代の上屋敷跡に各国の大使館が居を構え、広尾周辺のある渋谷区および隣接する港区内には、100を優に超える国々の大使館が散在しています。大学の敷地内にはインターナショナル・スクールがあり、目と鼻の先に国際理解教育の先進的な施設としても知られるJICA地球ひろばがあります。毎日のように大学生や職員が足を運ぶ広尾商店街にはエスニックのレストランやカフェがひしめき、さまざまな国の人々が昼夜を問わず舌鼓を鳴らしています。

さて、本年度の大会は、ユネスコが2010年を「持続可能なライフスタイル」に焦点を当てて「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」を推進していくことを提案しているのを受け、持続可能なライフスタイルを意識した大会運営を心掛けたいと考えています。大会の運営のあり

方自体が持続可能な共同体のモデルとなるよう工夫を凝らし、現在、先進諸国、発展途上国を問わず、喫緊の課題とされているアーバン・エコロジーについても考える契機にできればと願っております。

また本大会は、20周年記念の特別企画として、大会前日の7月2日(金)に松浦晃一郎ユネスコ前事務局長による講演を予定しております。10年間、ユネスコのトップとして指揮をとられてきたご経験のもとにグローバルな視野からこれからの時代の国際理解について語っていただきます。

オプション企画としては、7月4日(日)の大会終了直後から、JICA地球ひろばの見学および「地球案内人」による展示会場ツアーを組ませていただきました。ご関心のある方はお早めにお申し込み下さい。またご希望の方には、学内の御聖堂や施設を見学するキャンパス・ウォークも実施したいと考えております。

東京タワーや六本木ヒルズ、東京ミッドタウンなどの高層ビルがキャンパスから手に取るように見える距離にある聖心女子大学ですが、都心の喧騒を余所に落ち着きのあるキャンパスで皆様をお迎えし、自由闊達な議論が交わされ、参加される方々が「気づき」と「喜び」を得られるような大会運営に向けて準備を続けてまいります。今年、「成人」となる研究大会のこれまでを祝し、次のライフサイクルへと歩みだす第一歩を皆様と分かち合えることを今から心待ちにしております。



陽春のマリアンホール(聖心女子大学の構内より)

日本国際理解教育学会第20回研究大会(東京大会)のご案内

日本国際理解教育学会第20回研究大会実行委員会

日本国際理解教育学会第20回研究大会(東京大会)の概要について、ご案内致します。詳細については、過日お送り致しました大会要綱「日本国際理解教育学会第20回研究大会(聖心女子大学)のご案内」(事務局HP上にも掲載：<http://www.kokusairikai.com/>)をご覧ください。

1. 研究大会日程：2010年7月3日(土)・4日(日)

20周年記念特別講演会 7月2日(金)			
「グローバル化時代の国際理解と日本の課題」(松浦晃一郎 前ユネスコ本部事務局長)			
大会1日目 7月3日(土)		大会2日目 7月4日(日)	
9:30	受付開始	9:00	受付開始
9:30	自由研究発表	9:00	自由研究発表
12:00	昼食	12:00	昼食
13:00	20周年記念講演会	13:00	特定課題研究
14:00	シンポジウム	16:00	大会終了
17:00	総会	16:30	特別企画 オブショナルツアー (JICA地球ひろば)
18:00	懇親会		

2. 会場：聖心女子大学(渋谷区広尾4-3-1)

3. 聖心女子大学キャンパスへの交通(最寄駅から聖心女子大学キャンパスへのアクセス)

- 東京メトロ日比谷線「広尾駅」2番「天現寺橋(聖心女子大学)方面」出口下車、広尾商店街(散歩通り)を通り約3分
- JR渋谷駅東口または恵比寿駅より都バス「日赤医療センター前」行終点「日赤医療センター前」下車約3分
- JR品川駅より都バス「新宿駅西口」行「広尾橋」下車約4分
- JR目黒駅より都バス「千駄ヶ谷駅」、「新橋駅」行「広尾橋」下車約4分

4. 大会参加費・懇親会費について

- ①大会参加費(事前振込み)：一般会員3000円、学生会員2000円。(当日)：一般会員4000円、学生会員3000円、非会員5000円。
- ②懇親会費：一般会員及び非会員5000円、学生会員3000円
- ③昼食：1食(お茶付)1500円
※ご希望の方はお申込み下さい。代金の一部は発展途上国への寄付とさせていただきます。
※なお、本学の近辺には、多くの飲食店がございますので、どうぞご利用下さい。

5. 懇親会について

日時：2010年7月3日(土)18:00より
場所：聖心女子大学食堂

6. 20周年記念特別講演会

(7月2日(金)17:00-18:00)

20周年大会に相応しく、ユネスコ前事務局長の松浦晃一郎氏に「グローバル化時代の国際理解と日本の課題」について講演していただくことになりました。

7. 20周年記念講演会

20周年記念講演として東京大学教授の佐藤学氏に、「21世紀の教育としての国際理解教育の方向」(仮)について語っていただくことになりました。

8. シンポジウム

テーマ：「日本国際理解教育学会の到達点と展望—第20回研究大会を記念して—」

第20回大会は学会の節目となる記念大会ですので、学会の活動20年をふりかえり、未来を展望することをシンポジウムのテーマとします。第19回大会で試行した会員参加型ワークショップを取り入れ、「理論と実践をつなぐ」「学校と外部をつなぐ」「国際理解の学習領域をつなぐ」といった3つのテーマについて、課題提案者とともに会員相互が話し合い、これからの学会のあり方と課題について認識を深めていきたいと考えております。

9. 特定課題研究

テーマ：「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」

ユネスコが提唱し日本に大きな影響を与えた「国際理解教育」は、当初は「世界市民性の教育」などと称され、シティズンシップの教育として出発しました。今日、グローバル化が急速に進展する中であって、どのようなシティズンシップが必要とされているのか、それは日本の国際理解教育の概念や理論、実践にどのような変容を迫るのか、各登壇者に提案していただきます。北海道大会で提起された「転換期の国際理解教育」の課題をふまえ、これからの国際理解教育のありかたを皆さんと共に考えたいと思います。

10. 参加費・懇親会費・弁当代の振込先

- ①口座記号番号：00190-5-710436
- ②加入者名：日本国際理解教育学会第20回研究大会

11. その他

- 自由研究発表抄録原稿提出期日：2010年5月7日(金)必着【郵送のみ】
- 大会参加申込期日：2010年5月31日(月)必着【郵送またはE-mail添付】
- 大会参加費等振込期日：2010年6月4日(金)
※大会準備の関係上、事前のお振込みにご協力願います。(最終期限として6月4日を設定させていただきます。)万が一、期日を過ぎて振込みなされた場合には、必ず「振込受領書」などの振込みを証明できるものを受付でご提示ください。振込みが確認できない場合は、当日大会参加費を頂くことでもありますので、ご了承下さい。

(文責・永田佳之)

大会シンポジウム

日本国際理解教育学会の到達点と展望

同志社女子大学 藤原 孝章

日本国際理解教育学会の規約（第2条）に、学会の目的として「国際理解教育の研究と教育実践にたずさわる者、研究と実践を通じて、日本の国際理解教育を促進し、その発展に寄与する」とあります。第20回研究大会を迎えて、その目的はどの程度達成しているのか、どんな課題があるのか、未来の日本社会に向けて発信し、貢献するためにはどんなことが必要なのか、来し方を振り返り、未来を展望することは意義あることだと考えます。今回のシンポジウムはまさにそれをテーマにしています。

全体会での「日本国際理解教育が切り開いてきたもの」（米田伸次前会長）、「日本国際理解教育の到達点と課題」（大津和子副会長）といった課題提起のあと、「理論と実践をつなぐ」「学校と外部をつなぐ」「国際理解の学習領域をつなぐ」という、これまで学会が取り組んできた活動について3つの分科会を設定し、各分科会には、ファシリテーター、記録・レポーター、課題提案者を2人ずつ割り振り、参加者も討議や話し合いに参加するという、前回の第19回大会で試行した会員参加型ワークショップを取り入れていきたいと考えています。

前回と違うところは、地球的な課題といった社会問題に関する分科会ではなく、国際理解教育に関するカリキュラムや教育活動に関わる課題をテーマとした分科会設定になっているところです。学会でこれまで活動されてきた会員に課題提案をお願いし、実践の現場やこれから学会を担っていこうとされる方々に、ファシリテーター、レポーターとして分科会を運営していただけたらと考えております。

今まで学会を支えてこられた会員、これから続こうという会員の皆さんが、全員でテーマについて話し合い、学会に対する個々の会員の皆さんの思いを共有し、これからの学会のあり方と課題について認識を深め、「学会の未来に向けて」（多田孝志会長）の後、次の10年、20年を展望できたらと考えています。



第二正門から続く桜並木（聖心女子大学の構内より）

特定課題研究

グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育

筑波大学 嶺井 明子

第20回研究大会における特定課題研究「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」の準備状況につきまして、報告いたします（2010年2月末日時点）。

当日は以下のように報告をいただき討議を行う予定です。

司会：嶺井明子（筑波大学）

報告者：中山あおい（大阪教育大）

岡崎裕（プール学院大）

小関一也（常磐大）

桐谷正信（埼玉大学）

ユネスコが提唱し日本に大きな影響を与えた「国際理解教育」は、当初は「世界市民性の教育」などと称され、シティズンシップの教育として出発したといえましょう。その後、1974年の国際教育勧告（「国際理解、国際協力及び平和のための教育、並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」）、1994年「平和・人権・民主主義教育の総合的行動要綱」とガイドラインを提示してきました。この1994年の文書の中では、国際的次元を含む真のシティズンシップのための教育を探究することの必要性が強調されています。

今日、グローバル化が急速に進展する中であってどのようなシティズンシップが必要とされているのか、それは日本の国際理解教育の概念や理論、実践にどのような変容を迫るのか、各登壇者に提案していただきます。北海道大会（2007年、北海道教育大学）で提起された「転換期の国際理解教育」の課題をふまえ、これからの国際理解教育のあり方を共に考えましょう。

まず、中山あおい会員からは、1990年代半ばからシティズンシップ教育が注目されているヨーロッパに焦点をあて、そこでのキー概念である「アクティブ・シティズンシップ」についてその理念や背景など報告いただきます。

次に、岡崎裕会員からは、「グローバル時代」と呼ばれる現代において地域（まち）に生きる人間（ヒト）として、私たちに何ができるか、また為さねばならないのか、「ローカル・シティズンシップ」の視点から国際理解教育を再構築する提案がなされます。

小関一也会員からは「持続可能な世界」の実現には、「地球規模の問題」の解決に向けて「行動」するヒトの育成が必須であるという観点から、グローバル時代にもとめられるシティズンシップについて提言いただきます。

桐谷正信会員からは、アメリカの歴史カリキュラム改革を事例に、歴史教育を通じた多文化的シティズンシップの育成について報告いただきます。

最後に、宇土泰寛会員から、各報告者の提案を踏まえて、実践の場はどう返しながらか、今回の課題を詰めていくのか、事例をふまえながらコメントをいただきます。

以上のように予定しておりますので、会員の皆様にはご参加のほどお願いいたします。



大会自由研究発表に 62題目がエントリー

日本国際理解教育学会第20回大会自由研究での発表を募集しましたところ、2月末日までに62题目的の発表申し込みがありました。以下に、発表者氏名(所属)と「発表題目」を掲載致しますので、ご覧下さい(掲載の順番はアイウエオ順です)。

自由研究の発表者(所属)と「発表題目」

1. アッカーマン・ペーター (エアランゲン・ニュルンベルク大学) 「異文化理解に必要な言語能力とは何か」
2. 阿部 一郎 (<財>自治体国際化協会) 「多文化社会における地域コーディネーターのあり方について—石川県及び金沢市の事例から—」
3. 荒川 裕紀 (国立北九州工業高等専門学校) 「ボンダンスの繋ぐ過去と未来—多文化共生社会・ハワイ州マウイ島から見えてくるもの—」
4. 伊井 直比呂 (大阪教育大学附属高校池田校舎) ・大島 弘和 (大阪府立北淀高校) ・米田 謙三 (羽衣学園高校) ・田中 誠一 (大阪教育大学附属高校池田校舎) ・吉村 勇治 (大阪教育大学附属高校池田校舎) 「アジアにおけるESD国際カリキュラムの開発—韓国、中国、タイ、フィリピン、日本での共同開発と実践報告—」
5. 飯島 真 (越谷市立富士中学校 / 東京大学大学院) 「少数民族の文化および言語の持続可能性の実現に向けて—フィンランドサーミを事例に—」
6. 石川 一喜 (拓殖大学) 「シリアスゲームで学びは深められるのか—参加型学習における新しい教育方法論の模索—」
7. 石森 広美 (宮城県仙台東高校) 「高校生のグローバルシティズンシップに関する評価」
8. 泉谷 道子 (愛媛大学) 「社会貢献に求められる学生リーダーシップ能力の基盤養成—愛媛大学における学生リーダーシップ養成の試みから—」
9. 磯田 三津子 (京都橋大学) 「コミュニティの特質に応じた多文化共生と保育」
10. 岩本 泰 (東海大学) 「ESDFA (万人のためのESD) への助走的研究—『ESDのエッセンス』の検討から—」
11. 梅野 正信 (上越教育大学) 「判決書を活用した日韓授業開発研究」
12. 大滝 修 (茨城県立取手松陽高校) 「発達段階の相違性を活用するカンボジア協同学習—中学生・大学生・高校生間の『学びの相互作用』とその発展性について—」
13. 大津 和子 (北海道教育大学) ・東峰 宏紀 (恵庭市立若草小学校) ・田中 孝治 (恵庭市立若草小学校) 「韓国理解を深めるすぐろく教材の開発」
14. 大野 順子 (桃山学院大学 / 関西大学大学院) 「多元的社会におけるシティズンシップ (市民性) のあり方」
15. 小川 修平 (中央大学大学院) 「『多様性の中の調和』を実現する教育実践—フリーダム・ライターの社会心理学的分析—」
16. 織田 雪江 (同志社中学校) ・林 慶澤 (全北大学校) ・桐谷 正信 (埼玉大学) ・CHA, Boeun (東京学芸大学) 「米から考える—グローバルゼーションとローカリゼーション—」
17. 小野 行雄 (神奈川県立大楠高校 / 日本福祉大学大学院) 「意欲と学力の低い高校生に対する開発教育ワークショップ実践」
18. 笠井 正隆 (関西外国語大学短期大学部) 「グローバルシティズンシップに関する短期大学生の意識調査」
19. 風巻 浩 (神奈川県立麻生高校) 「『対話的学びのネットワーク』構築による日韓歴史討論学習」
20. 釜田 聡 (上越教育大学) ・中山 博夫 (目白大学) ・許 信恵 (漢南大学) ・多田 孝志 (目白大学) ・西村 克仁 (同志社香里中・高校) ・堀 幸美 (江別市立大麻東小学校) ・若井 知草 (目白大学) ・金 宗勲 (APCEIU) ・金 多媛 (Sangdong Junior High School) ・郭 雲霞 (人民教育出版社综合文科室) ・祖 国華 (鄭州中学校附属小学校) 「日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発—『人間関係』に着目して—」
21. 川上 誠 (公文国際学園) 「ユネスコ・世界寺子屋運動」
22. 河内 嵩史 (上越教育大学) 「『貧困』から学ぶ国際理解—エンパワーメントという援助の視点から—」
23. 北尾 悟 (奈良女子大学附属中等教育学校) 「ユネスコスクールにおける新カリキュラムの創造—WHE・ESDにもとづく『総合学習』の再編の取り組み—」
24. 木林 祥子 (日本福祉大学大学院) 「国際理解教育における家庭科の役割—生活文化の歴史的理解からのアプローチ—」
25. 木村 慶太 (立命館守山中学校) ・韓 敬九 (ソウル大学校) ・山田 幸生 (香芝市立鎌田小学校) ・今田 晃一 (文教大学) 「ICTを活用した異文化理解教育—日韓昔話に関するデジタル紙芝居製作を通して—」
26. 栗山 丈弘 (文化女子大学) ・郭 雲霞 (人民教育出版社課程教材研究所) ・周 晓超 (北京第二実験小学校) ・藤原 孝章 (同志社女子大学) ・徐 京田 (聲浦中学校) 「ラーメン教材の実践とその分析—中国・北京第二実験小学校での実践を中心に—」
27. 小嶋 薫 (無所属) 「教科書における名まえの表記について」
28. 小林 茂子 (中央大学) 「戦前期マニラ日本人学校における現地理解教育について—『フィリピン読本』(1938年)の分析をとおして—」
29. 小林 亮 (玉川大学) 「多文化アイデンティティ形成におけるESDの役割—内なる多文化共生に向けて—」
30. 近藤 真理子 (近畿大学) 「学芸員養成課程における授業実践の一試み—もの、自分との対話を目指して—」
31. 五月女 賢司 (国立民族学博物館) 「身体表現による異文化に対する気づきとその深化の可能性—『影で出会う・影でつながる』ワークショップの事例から—」
32. 鹿野 敬文 (福岡県立福岡高校) 「県立進学級における国際理解教育の方法」
33. 穴戸 佳子 (桜美林大学) ・遠藤 悠子 (相模原市立宮上小学校) 「国際交流にチャレンジ『YES, WE CAN! せかいなかよクラブ!』」
34. 清水 貴恵 (桜美林大学) ・岩本 貴永 (桜美林・草の根国際理解教育支援プロジェクト) 「ヒト・モノ・チエを活用した『ニーズ対応型』および『創造型』の教育支援活動—桜美林・草の根国際理解教育支援プロジェクトの活動から—」
35. 曾我 幸代 (聖心女子大学大学院) 「ESDに求められる価値観とは—環境倫理の視点から—」

36. 高雄 綾子 (フェリス女学院大学) 「ドイツにおける平和教育と ESD の関係—東アジアへの示唆の視点から—」
37. 高田 小百合 (聖心女子大学大学院) 「国際理解教育の現状と課題—小学校教員への調査を通して—」
38. 竹内 久顕 (東京女子大学) 「平和教育研究の到達点と課題—国際理解教育との接点に着目して—」
39. 田島 弘司 (上越教育大学) 「ガンディーの共生観と平和観に関する一考察」
40. 辻 良隆 (大阪市立南高校) 「高校生による『仮想世界ゲーム』実施報告—南北貿易ゲームを超える ESD アクティビティとして—」
41. 津山 直樹 (中央大学大学院)・森茂 岳雄 (中央大学)・姜 英敏 (北京師範大学)
「価値観の変容をめざした対話的交流の試み—日中大学院生の相互理解を事例として—」
42. 永田 佳之 (聖心女子大学) 「国際理解教育と ESD のシナジー」
43. 中山 京子 (帝京大学) 「ポストコロニアルの視点から『南の島』を考える—ゲーム理解を事例に—」
44. 中和 悠 (広島大学大学院) 「国際理解教育における方法論の再検討 (II) —JICA 国際協力出前講座に注目して—」
45. 萩原 南 (上越教育大学大学院) 「外国人児童と日本人児童の異文化適応に関する研究」
46. 服部 圭子 (近畿大学)・Han, Geon-Soo (Kangwon National University)・森茂 岳雄 (中央大学)・中山 京子 (帝京大学)
「『人の移動』(留学生) をテーマにした日韓中三ヶ国教材開発—インタビューおよび読み物資料を用いて—」
47. 服部 由起 (青山学院大学) 「イギリスにおける開発教育からグローバルシティズンシップへの転換—適応か新たな展開か—」
48. 林 加奈子 (桜美林大学) 「開発教育実践における省察と行動」
49. 福山 文子 (お茶の水女子大学大学院)
「外国人児童・生徒教育と『公共性』—シカゴ公教育政策『Renaissance2010』への批判を手掛かりとして—」
50. 藤崎 隆博 (鹿児島大学大学院 / 鹿児島市立中山小学校)
「シティズンシップ教育の知見を活かした小学校における『社会参加型』国際理解教育」
51. 前田 ひとみ (目白大学)
「異文化コミュニケーション能力の育成に向けた国際理解教育の実践と英語学習への展開—日本人学生と留学生の授業外共同プロジェクト活動を通して—」
52. 眞島 拓也 (上越教育大学大学院) 「日本統治期台湾の学校教育における植民政策の影響について」
53. 松井 克行 (大阪府立三島高校) 「かつての敵国との国際理解教育の内容構成について—『独仏共通歴史教科書』を手がかりとして—」
54. 松村 淳 (岩国市立愛宕小学校) 「仏独関係の教材化—小学校社会科の戦後史学習や国際理解学習における歴史・政治学習の統合的内容構成—」
55. 丸山 英樹 (国立教育政策研究所) 「ドイツにおけるユネスコ・スクール制度と教師のイニシアチブ」
56. 水野 涼子 (聖心女子大学大学院) 「日本における ESD 実践校の可能性と課題—ホールスクール・アプローチの視点から—」
57. 南 美佐江 (奈良女子大学附属中等教育学校 / 立教大学大学院)
「国際交流事業で育むグローバル・コミュニケーション能力—奈良女子大学附属中等教育学校の実践から—」
58. 宮野 祥子 (早稲田大学大学院) 「多文化共生へ向けての地域日本語教育における教材開発—ことばと文化の視点からの教材分析—」
59. 山田 幸生 (香芝市立鎌田小学校)・木村 慶太 (立命館守山中学校)・吉田 誠 (奈良教育大学)
「ものづくりから広がる国際理解—カナダ北西海岸先住民の木箱作りを通して—」
60. 横田 和子 (聖心女子大学) 「葛藤のケアによる学びの編み直しの検討」
61. 吉田 直子 (青山学院大学大学院)
「多様性を育む『場』に関する一考察—自己と他者への気づきを深めるためのピア・エデュケーションの実践観察から—」
62. 和田 俊彦 (明星高校) 「高等学校英語科教員は World Englishes をどのようにとらえているか」

自由研究発表での留意点

①発表抄録の作成について

発表抄録は、発表要項 (送付済み、大会ホームページにも掲載) の書式、見本等に基づいて、A4 判 2 ページで作成して下さい。本年度は例年同様、提出された原稿をそのまま原版といたしますので、完成原稿を A4 判でお送り下さい。

抄録原稿の提出期限が 5 月 7 日 (金) 【郵送必着】となっております。提出期限に遅れますと抄録集に掲載できない場合もありますので、締切には十分にご注意いただきますよう、お願いいたします。

②使用機材について

分科会の各会場には基本的にスクリーン、プロジェクター、及びパソコンが付設されております。会場に備え付けのパソコンに時間的余裕をもってご自身のファイルをコピーするようお願い申し上げます。使用するパソコンの OS は Vista ではなく、XP の場合があります。念のためパワーポイントをご使用の方は「97 - 2004 プレゼンテーション (ppt)」版にて保存の上、ご自身のファイルをご持参下さい。また、万が一に備えて、パソコンとプロジェクターのコネクターを各自ご用意いただくと助かります。

③配布資料について

抄録に掲載されている発表内容以外に、配布資料が必要な場合は、1 つの発表につき最低 30 部を事前にご用意ください。研究大会実行委員会が印刷をお引き受けすることは致しません。

④発表時間について

発表の持ち時間は個人発表を 30 分 (発表 20 分、質疑応答 10 分)、2 名以上の共同発表を 40 分 (発表 30 分、質疑応答 10 分) とします。フロアとの活発な意見交換のため、発表者は質疑応答時間が十分に取れるようにご配慮下さい。

では、会員の皆様のお越しを広尾の地にてお待ちしております。

(文責・永田佳之)



聖堂内でのコーラス (聖心女子大学の構内より)

韓国国際理解教育学会大会の報告

第10回記念大会が梨花女子大で開催

埼玉大学 桐谷 正信

日本から前回は越える会員が参加

2009年11月14日・15日、第10回韓国国際理解教育学会がソウルの梨花女子大で開かれた。私は、今回初めての参加であったが、記念すべき第10回大会であること、日中韓共通国際理解教材開発プロジェクトの中間報告を自由研究発表の中で行ったこともあり、日本からは前回（2008年）の8名を大幅に上回る19名の会員が参加した。

大会の前日の午後、日中韓共通国際理解教材開発プロジェクトのメンバーは、ソウルで最も賑やかな繁華街である明洞にあるAsia-Pacific Center of Education for International Understanding(APCEIU)で研究会を開き、研究成果についての討議及び大会での発表の準備を行った。その後の歓迎レセプションでは、韓会長をはじめ関係者の方々に歓迎していただいた。

第一日目の14日の午前中に、七つの分科会で自由研究が行われた。日本からの参加者は合計8本の発表を行った。その内、3本の発表が日中韓共通国際理解教材開発プロジェクトの成果報告であり、私は藤原孝章会員、栗山丈弘会員達と共に「食」グループの成果を発表した。同プロジェクトの関連としては、大津和子会員、森茂岳雄会員、中山京子会員、服部圭子会員による「人の移動」グループの成果が、中山博夫会員による「人間関係」グループの成果が発表された。その他にも、石川祥一会員による外国語教育に関する発表、渡辺幸倫会員による在日韓国人の外国語教育に関する発表、梅野正信会員による判決文を活用した人権教育の日韓共同実践に関する発表、金田修治会員によるパールハーバーの日米共同歴史教材開発に関する発表、松井克行会員による独仏共通歴史教科書に関する発表が行われた。

多文化主義を越えて国際理解教育へ

14日の午後には、第10回研究大会記念式典が開催され、梨花女子大校長やAPCEIU総主事、大津和子日本国際理解教育学会副会長から祝辞が述べられ、その後、韓国国際理解教育学会のこれまでの発展の歴史と今後の展望についての講演があった。



日中韓国際理解共通教材開発プロジェクトの参加者



記念大会シンポジウムの様子

シンポジウムは、「Beyond Multiculturalism To Education for International Understanding」「多文化主義を越えて国際理解教育へ」という非常に刺激的なテーマで行われた。日本から中山博夫会員が「日本における多文化教育と『外国語活動』」について、2011年から開始される「外国語活動」の実践においては多文化教育の視点が必要であること、また「共創的対話(Creative and Cooperative Dialog)」が重要であることを、豊田市や浜松市、根室市などの多文化都市での事例を基に報告された。パク・ミョンキュ氏(ソウル大学)は、北朝鮮との統合問題について、韓国社会の多文化化が進行している現在では、これまでの単一民族を前提としてきたアプローチを転換することの必要性を提起した。グァク・サムグン氏(梨花女子大)は、従来の国際理解教育が追究してきたグローバル経済の進展と貧困、環境などの諸課題をジェンダーの視点から捉え直す視点を提起し、女性主義グローバル・シティズンシップ育成の必要性を説いた。討議の中で韓会長から、現在韓国では「多文化主義」という言葉が独り歩きしてしまっており、今一度国際理解教育のあるべき姿を捉え直す必要があるのではないかと、シンポジウム・テーマ設定の趣旨についての説明があった。

ソウル市内のカルチャル・ツアー

15日の午前中に予定されていたワークショップが中止となり、その代わりにソウル市内のカルチャル・ツアーが開催された。残念ながら航空機の関係で日本からは中山博夫会員と赤池千春会員と私の3人のみの参加となった。韓国からは3名の会員が参加した。その内2名は日本への留学経験があり、日本語で案内をしてもらえた。総勢6名のこじんまりしたツアーであったため、アットホームな雰囲気でする市内を回ることができた。当日は寒波の襲来で風が強く、また冷たかったため、整備された世宗路と景福宮、仁寺洞を中心に歩いた。高層ビルが立ち並ぶ近代的な姿と伝統のコントラストが印象的であった。

最後に韓会長をはじめ韓国国際理解教育学会関係者の方々、APCEIU関係者の方々には、心からお礼を申し上げたい。今年7月の東京大会(聖心女子大学)で再会できることを心待ちにしている。

国際理解教育研究会の報告

名古屋研修会

国際理解は人と人をつなぐこと

東海学園大学 浅川 和也
ESD学校教育研究会 長岡 素彦

「ESDと学校教育」をテーマに日本国際理解教育学会とESD学校教育研究会の共催（ESD授業デザインプロジェクト公開研究会）の形で2009年10月31日に東海学園大学を会場に研修会が行われた。学会員ほか遠方からも学生や地域の方（2歳のお子さんの参加も含めて32名の参加があった。またこの研修会は愛知県教育委員会および名古屋市教育委員会の後援とEPO中部（中部環境パートナーシップオフィス）、NIED（国際理解教育センター）の協力によって行なわれた。

小学校の英語が2010年4月から前倒しで5、6年生から本格導入されるなか、先駆的に取り組んでいる豊田市や伊賀市の先生方および外国人集住地域である東海地方で当事者の方をも迎え、国際理解教育とESDとあわせて考える場とする構想を持った。

参加型ワークショップの心地よさを実感

名古屋では20年来、国際理解教育に関わっているNIEDにファシリテーションを依頼し、伊沢令子さんの進行ですすめられた。アイスブレイキングにはじまり、セッションでのアクティビティは次第に参加者の関与が高まるようになされ、心地よい時間と空間を共有することができた。

セッション1「地球的課題とよりよい未来と国際理解教育・ESD」で、「地域の課題・地球の課題～変えたいものは何だろう」「未来のビジョン～私たちの望むよりよい未来の姿を共有しよう！」「教育と私たちの社会～誇りに思うこと・残念に思うこと」という3つのステップでテーマにとりくみ、それぞれ全体で共有した。

その後、2つのミニレクチャーがあった。会長の多田孝志氏（目白大学）の「国際理解教育とは」では学習方法について言及があり、参加型学習つまり生徒が主人公になる



多田会長（左端）によるミニレクチャー



フロアからの質問に答える山本、浮洲の両教諭

ステージとしての学習の場のあり方が強調された。ESD学校教育研究会の長岡素彦氏からは「ESDとは」としてESDの未来志向性は具体的な生活の場にあるとし、まちづくりや福祉との融合を示唆された。

ESDは相互理解から

セッション2「実践から学ぶ国際理解教育・ESDの可能性」では、「リソース・パーソンの事例から学ぼう！」として3人の事例提供者から話を聞いて討議を行った。伊賀市立友生小学校非常勤講師のオチャンテ・ロサ氏は日本で育った「在留外国人」としての生活や現在小学校で行っている授業などを述べた。三重県名張市桔梗が丘小学校の山本郁子教諭は小学校外国語活動の目標を「人と人をつなぐ」とし、教員と児童、英語ボランティアと「伝え合い」を意識したコミュニケーションプログラムを行っている。豊田市立小清水小学校の浮洲京子教諭は、小学校外国語活動での国際理解教育として小学校の英語の時間の英語ノートの活用やワークショップアクティビティを通じて、英語を学ぶことだけでなく「どんな子とでも話ができ、遊ぶことができること、仲間はずれにしないこと」をひとつの目標にしているという。質疑応答では、「英語の時間」と「総合的な学習の時間」における関係、そのほか教育方法や教育現場での問題などの多様なテーマが論議された。

セッション3「実践につなげよう」では「ふりかえりーわたしが今日学んだこと・これから取り組もうと思うこと」を参加者が考え、これらを受けて、学会理事の宇土泰寛氏（相山女学園大学）が講評のなかで「今回の授業実践の発表では、小学校の英語の時間で英語を学ぶだけでなく、どんな子とでも話ができ、遊ぶことができること、仲間はずれにしないことを学ぶことも必要である」とも述べられた。

世界を持続可能にするには、環境や開発の問題だけでなく、人と人をつなぐ相互理解が必要である。そのためには、小学校での英語教育でも英語を身につけるのみならず人と人をつなぐ相互理解の教育としての国際理解教育およびESD（持続可能な開発のための教育）をすすめることが重要であろう。

第20回大会に向けて研究会を実施

椋山女学園大学 宇土 泰寛



公開研究会の報告者（左端が筆者）

「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」プロジェクトは、日本国際理解教育学会の設立趣旨および20年間の軌跡をふまえ、北海道大会（2007年7月）でのシンポジウム『「転換期」にたつ国際理解教育』の認識を基礎に、「国際理解教育」の概念のさらなる明確化という課題に、2008年10月の第1回公開研究会以来、9回の研究会を開催し、取り組んできた。そして、今回、第10回公開研究会を以下のように開催し、今年の聖心女子大学での大会に向けて、課題を深めることを目指した。北海道から九州まで、14名の参加者で、活発な議論を行った。

日時：2009年12月12日（土）10時～12時
場所：中央大学駿河台記念館 508号室
報告者：嶺井 明子（筑波大学）
小関 一也（常磐大学）
岡崎 裕（プール学院大学）
桐谷 正信（埼玉大学）
司会：宇土 泰寛（椋山女学園大学）

4人の研究者からの提案

司会の宇土より本プロジェクトの経過説明の後、4人の報告者が提案を行った。

①嶺井 プロジェクトの趣旨説明

北海道大会時の状況は、「転換期」というよりも、実は「危機」にたつといった表現のほうが適切であったかもしれない。「学力低下論」、「総合的な学習の時間」における英語活動偏重などによって、実践的に国際理解教育が解体、浸食されつつあり、またESDといった概念の登場、シティズンシップ教育などの影響もあり、「国際理解教育とは何か」が改めて問われる状況にあった。世界の状況は、さら

に大きく変化しつつある。こうした中で、グローバル時代のシティズンシップという視点から「国際理解教育」が「危機」から転換する方向性を探りたい。

②小関 「グローバル時代のシティズンシップ」

今日の国際理解教育とESDの概念整理を試みながら、国際理解教育を「21世紀の生き方を学ぶ教育」として位置づけ、そこで目指されるシティズンシップについて、丁寧に歴史的背景も踏まえて提案を行った。

③岡崎 「グローバル時代の市民性 国際理解教育・ESD・地域社会」

ユネスコ国際教育の歴史的経過も押さえながら、Active Citizen（行動する市民）像、方法の転換（パラダイムシフト）、地域の時代、グローバル時代のネットワークモデルをキーワードにして提案を行った。

④桐谷 「グローバル時代の多文化的歴史的教育におけるシティズンシップの育成」

グローバル時代だからこそ必要な多文化教育、多文化教育における歴史教育の果たす役割、多文化的歴史カリキュラムにおける「多様性」と「統一性」を主な論点としながら、歴史教育における多文化的シティズンシップの育成の提案を行った。

参加者から寄せられた意見

これらの提案を基にしなが、参加者から多数の意見をいただいた。

- ・学会の基本的な視点から論じている点への評価
- ・第2次科研との関連やそこでの研究成果の継承
- ・実践と理論をからめながら進める必要性
- ・現在欠落している文化的参加論の視点の重要性
- ・ESDと国際理解教育の関係、国際理解教育からみてESDに欠けている点の指摘など

このような論議の中で、シティズンシップ（ESDも含めて）からのアプローチを基盤に、大会での特定課題を進めることの共通な方向性が得られた。そして、長崎や鹿児島参加者からも、公開研究会へのありがたいコメントをいただき、有意義な公開研究会となった。



参加者による熱のこもった協議

全国各地の研究会からの報告

持続可能な社会形成と教育

聖心女子大学 永田 佳之

「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」研究会（プロジェクト方式の研究、詳しくは本誌11面を参照）が12月19日、聖心女子大学で行われました。今年度の研究会は「ESDらしい学びとは何か」をテーマに据え、G・ベイトソンの学習論である「学習 I」「学習 II」「学習 III」を参照しながら具体的な実践の分析を試みています。ここでは簡単ではありますが、当日の内容と様子をお伝えしたいと思います。今回、発表をお願いした報告者とテーマは下記の通りです。

- 第1報告：「教育実践の多層性をESDの視点から探る」
宇土泰寛先生（相山女学園大学教授）
- 第2報告：「サティシュ・クマールとESDを結ぶもの」
横田和子先生（聖心女子大学非常勤講師）

宇土先生は、戦後の平和理念と同じくらい目標が崇高であるがゆえにESDは自ずと包括的な性格となることを指摘され、目標の高さと実践の深さにESDの特徴を見出し、おられました。今回、発表された「宇宙船地球号」等の実践はまさに「深み」をもったものであり、それは時には子ども達を「価値ジレンマ」に陥らせるほどの実践でした。宇土先生は最後にご自身の実践をESDと呼べるのかどうか、と謙虚におっしゃっていましたが、参加者の誰もを首肯させるほどの質の高いESD実践であったと思います。それは、トピックとして環境等を扱っているからではなく、学習者の価値観の揺さぶりに迫るほどの深まりがある実践、つまり「学習 III」であるからと言えるでしょう。

横田先生は、サティシュ・クマール（『君あり、ゆえに我あり：依存の宣言』講談社学術文庫）の言葉と実践、そして生き様を題材に、「かかわらないものがない学び」について静かに力強く語って下さり、サティシュの世界がいかに豊穡であり、要約しきれない何かを秘めているのかを伝えて下さいました。サティシュの〈存在〉とESDとのアナロジーについても言及し、「ESDがマジョリティになる必要はなく、ESDも、マジョリティにとって必要とされるマイノリティであることの意義」について強調されました。横田先生のマイノリティとしてのESDというメッセージは、ヘッセの『クヌルプ』や北欧の喩え話である「鰯と鯨」、「一割の妙」（拙著『オルタナティブ教育』新評論）などの知見と重ねて議論され、深まりのある討議が行われました。

今回の研究会を終えて、参加者はある種の「勇気」をもらったように思えます。常に逆境を順境に変えて来られた宇土先生と、変えたい現実に対しても軽やかさをもって対峙する横田先生。お二人に共通しているのはユーモア、そしてダイアログだと言えましょう。

授業後の「第二ラウンド」は広尾の居酒屋で温かなウドン鍋を楽しみました。ここでも宇土先生を囲み、「宇宙船地球号」

の表舞台ができるまでの「裏舞台」のお話をうかがい、ハレをつくる日常の地道な活動の大切さについて皆で共有するという、これまた贅沢な時間を過ごすことができました。

最後になりますが、この場をかりて、参加された会員の皆様、特にご報告いただいたお二人の先生に心よりお礼を申し上げたいと思います。

世界遺産学習全国プレサミット in なら

奈良市教育委員会 中澤 静男



参加者による協議風景

世界遺産学習は「世界遺産についての学習」だけでなく、文化遺産を尊重する態度を養う「世界遺産のための学習」や、文化遺産を通して地域を大切に思う心情を養ったり、国際理解教育や環境教育、平和教育などを展開したりする「世界遺産を通じた学習」に取り組むことで、持続可能な社会の担い手を育てることをねらいとしている。

この文化遺産を活用したESDの教員研修および市民への啓発を目的に、日本/ユネスコパートナーシップ事業の一環として、2009年12月23日（水）に奈良教育大学を会場に「世界遺産学習全国プレサミット in なら/奈良教育大学ユネスコ・スクール教育実践研究会」（後援・日本国際理解教育学会）を開催したところ、市内教職員や市民のほか、全国各地からユネスコ・スクールの教員や研究者など約550名の参加者が集い、熱気につつまれた研究大会となった。

まず、奈良市立済美小学校6年生が今年度取り組んだ世界遺産学習を発表した。済美小学校では江戸時代の奈良の名所「南都八景」をもとに、800人へのアンケート調査を行うなど「新南都八景」の選定に取り組んだ。この学習発表も踏まえ、田淵五十生会員をコーディネーターに「世界遺産学習のめざすもの」をテーマとしたシンポジウムを行い、「文化遺産には人の思いが込められていることを子どもたちに実感させることが重要」「子どもたちの前に先生や地域の大人が文化遺産の価値を本当に知っていく必要がある」など、文化遺産を活用したESDを推進する上でのキーポイントが明らかにされた。その後、東大寺の森本公穰氏による東大寺お水取りについての講演、さらには市内外の世界遺産学習実践者による12本の分科会報告と熱心な意見交流が行われ、参加者からは「身の回りの文化遺産をもっと教材開発したいという思いが持てるようになった」などの声が聞かれた。

次回は2010年11月28日（日）に奈良教育大学を会場に開催する予定である。

2009年度 理事会(各委員会等) 報告

研究委員会より

中央大学 森茂 岳雄

研究委員会では、2007年度よりプロジェクト方式を採用し、毎年理事を研究代表とする新プロジェクトを立ち上げ、3年サイクルで研究し、成果を公表する方式に変更した。第一期の共通研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とし、各プロジェクトは、順次、年度毎に公開研究会やワークショップ等を通して研究成果を積み上げ、3年目の大会時に特定課題研究として公開し、それを学会紀要に特集としてまとめることになった。

- (1) 2007年度開始の「ユネスコの世界遺産教育と日本の国際理解教育」(担当理事:田淵五十生)は、本方式の移行期間のため2年間で行い、2008年度大会(富山大)で研究成果を報告し、学会紀要 Vol.15に「特集」としてまとめた。
- (2) 2007年度開始の「ことばと国際理解教育」(同:山西優二)は、2009年4月19日にオープンフォーラム「ことばと国際理解教育—ことばの文化性・身体性・音の力—」(早大)を開催し、中間的な研究成果の共有を行った。また2009年6月の第18回大会(同志社女子大)において研究成果の報告を行った。また10月17日には「児童に身近な外国語への気付き—国際理解教育と言語意識教育—」、11月21日には「日本語教育の視点から国際理解教育を考える」というテーマで公開研究会(共に早大)を続け、それらの成果をまとめ学会紀要 Vol.16で発表予定である。
- (3) 2008年度開始の「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」(同:嶺井明子)は、現在定期的に公開研究会を開催し研究を積み重ねている。2009年12月12日にオープンフォーラムを開催し、2010年3月27日にも公開研究会を予定している。この研究活動を受け、第20回大会(聖心女子大学)で研究成果を報告する予定である。第一期プロジェクトが今年度で終了するため、今後の学会研究のあり方について常任理事会、理事会で検討の結果、引き続きプロジェクト方式で行うこと、及び第二期についても共通の研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とすることが確認された。また、2010年度から開始するプロジェクトを公募した所、(4)「持続可能な社会形成と教育—ESDの実践基盤に関する総合的研究—」(同:永田佳之)の応募があり、新規プロジェクトとして研究を開始することが承認された。尚、2011年度開始の新規プロジェクトの申請希望者は、理事を通して本年6月25日(金)までに申請して下さい。申請用紙は、学会事務局又は森茂までご請求下さい。

紀要編集委員会より

同志社女子大学 藤原 孝章

現在、学会紀要第16号の編集作業中です(2010年6月発行)。今回は、投稿論文が15本(内訳は、実践研究5、研究論文7、特集テーマ研究論文3)と多くありました。編集委員会としては慎重かつ丁寧な査読と改善へのコメントを心がけており

ますが、惜しくも掲載に至らなかった会員の皆様には、次号へのチャレンジ(投稿)をお願いする次第です。

特集論文では、「ことばと国際理解教育」のテーマで、学会特定課題研究の3年間の成果が論文ならびに文献リストとして、査読論文とほぼ同じ分量で掲載される予定です。次の第17号(2011年6月発行)のテーマは、「シティズンシップと国際理解教育」です。特集論文での投稿論文も受け付けておりますので、自由投稿とあわせてご準備ください。

他に、前号と同様、公文国際奨学財団助成による海外研修や研究大会シンポジウム、韓国国際理解教育学会、みんぱくとの博学連携プロジェクトの各報告が掲載の予定です。

紀要16号の大きな変化は、創刊号以来、国際理解教育学会を紀要誌出版の面から支援し、ご協力をいただいた創友社にかわって予算などの諸般の事情から、印刷発行を変えたことです。創友社社長の新井次郎氏には、歴代の編集委員会を代表して心より謝意を申し上げます。なお、第17号の投稿応募のメ-cutについては、本年7月3、4日に聖心女子大学で開催されます東京大会のあと、1ヶ月後の8月初旬を目処にしております(正式の編集日程については、学会ホームページ等でご確認ください)。

最後に、学会の新体制の発足に伴い、紀要編集も現在の委員会は3年の任期を終え、新しい委員会が第17号から編集等を担当します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

理事会より

目白大学 中山 博夫

今年度2回目の理事会が、2009年12月12日に中央大学駿河台記念館で開かれた。参加者は、多田孝志会長、大津和子副会長を始め10名の理事に事務局2名と学会理事選挙の選挙管理委員長を含めた13名である。

理事会では、研究プロジェクトに関する議論がなされた。現在、山西理事を中心とした「ことばと国際理解教育」、嶺井理事を中心とした「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」、永田理事を中心とした「持続可能な社会形成と教育—ESDの実践基盤に関する総合的研究」の3本が進行している。

森茂研究委員会委員長より、各プロジェクトが順調に成果を上げていることが報告された。また、新規研究プロジェクトも募集されることを確認した。

2010年の研究大会(聖心女子大学)が第20回を迎え、その記念行事として行う記念出版と記念シンポジウムについて議論された。記念出版としては、『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ—』が明石書店から6月下旬を目途に発刊される予定である。また記念シンポジウムは「日本国際理解教育学会の到達点と展望」と題して、「理論と実践をつなぐ」「学校と外部をつなぐ」「国際理解の学習領域をつなぐ」といったテーマで、これからの学会のあり方と課題について論議を深めようということになった。

永田理事からは、第20回研究大会の準備の進捗状況が報告された。ユネスコの松浦前事務局長の講演の可能性も協議された。この講演は、その後松浦氏より快諾を得ることができた。

会員だより

「学びの全身化」めざす獲得型教育研究会

日本大学 渡部 淳



ドラマ技法による獲得研のワークショップ風景

参加型の学びを促進する「専門家としての教師の資質」の解明が、国際理解教育の研究にとって重要な課題になっている。そこで、4年前に「参加型アクティビティの体系化」と「教師研修プログラムの開発」を目指す獲得型教育研究会（略称：獲得研）を創設した。会員は、全国に散らばる小学校から大学までの教師たち40人。「会員＝シリーズ本の執筆者」という実験的な研究会ということで、これまで会員数あえて40人に限定してきた。

研究のサイクルは、定例会で種々のアクティビティを経験→授業で汎用性を検証→論文にまとめて交流、という構造である。これと並行して、研究経過を公開する「春のセミナー」、都内の公立中学との提携による新人教員研修、首都圏の若者が参加するプレゼンテーションの祭典「高校生意見発表会」などのプロジェクトに取り組んでいる。この結果、第Ⅰ期（3年間）だけで、1800通を越すメールが会員の間を飛び交うことになった。

第Ⅱ期に入り、「獲得研シリーズ・全5巻」（旬報社）の刊行が始まった。『学びを変えるドラマの手法』を皮切りに、学びのウォーミングアップ、ディベート、プレゼンテーションなどの巻が続く。これに先立ち、J・ニーランズ氏（ウォリック大学教授）と筆者の共著『教育方法としてのドラマ』（晩成書房）も上梓した。

期せずして、いま「教員養成課程の6年制化」や免許更新講習が政策論争のテーマになっている。獲得研では、「春のセミナー：思いを声にだす勇気、動き出せる身体の育成」や全国でのワークショップを通して、地道に教師研修の将来像を提案したいと考えている。

日本大学文学部で3月27日（土）に行われたセミナー等の詳細については、獲得研HPを参照下さい。
(<http://www.kakutokuken.jp/>)

アンケート結果から見えてくるもの

大阪府立茨木西高校 柴田 元

昨年8月の本学会と民博との共催「第5回博学連携教員研修ワークショップ」の報告を本学会紀要にまとめるため、100枚を超える参加者アンケートに目を通したのだが、読み進むうちに面白くなり、時間の経つのを忘れて読み耽ってしまった。研修から学んだこと、感動したこと、さらには自分の仕事のことや研修企画への提言など、率直かつ真摯な思いが伝わっている。参加者の学びからさらに学んだり、ものを考えるヒントをもらったり、筆者にとってアンケート用紙を読む作業は原稿のネタ探しの枠を超え、意義深い学びの場となった。その一部を紹介したい。

フェアトレードを考える分科会【ひとかけらのチョコレートから】の参加者の感想。『研究者の視点から解説や情報提供があるのが良かった。ワークショップを企画・実施する者は、テーマの本質を詳しく理解しておくことが必要だと思った。』—専門家がすぐ隣にいるというのが民博でのワークショップの強みである。ファシリテーターや教師は、テーマの内容そのものについての認識を深めるための勉強を怠ってはならない、自戒を込めてそう思った。

次は、簡単な道具を用いて竹から“自分だけの楽器”をつくる分科会【モノからひらめくモノコード】の感想。『シンプルな素材、限られた道具でモノをつくるには、技術・アイデア・知恵がいる。多くを生徒に与え過ぎるよりも、ヒントやアイテムが少ないなかでいかに工夫するかを考えさせることの大切さがわかった。これからの授業に活かしていきたい。』—自然、素朴さのなかに真の“豊かさ”が宿っているにちがいない。生きる力、考える力を身につけさせるために教師はどのように発想を転換すればよいか、大きなヒントをもらったような気がした。

アンケートには参加者の魂から湧き出した声詰まっていた。分析した結果をスタッフがしっかりと共有し、討議を加えて次回大会に生かしていかなければならないと思う。



竹を使って楽器をつくる（博学連携ワークショップより）

小学校における外国語（英語）活動

大妻女子大学 服部 孝彦

千葉県南房総市立南三原小学校と和田小学校は千葉県教育委員会及び南房総市教育委員会の研究指定をうけ、外国語（英語）活動に積極的に取り組み成果をあげている。私はこのプロジェクトの運営指導委員として、ここ2年間頻繁に南三原小学校及び和田小学校を訪問し、先生方にカリキュラム、指導方法、教材開発等、多方面にわたり指導助言をさせていただいている。

南三原小学校と和田小学校は千葉県最南端の南房総市にあり、地域人口は4,000人、第一次産業が中心で、少子高齢化が急速に進んでいる地域である。両小学校は同地域の和田中学校と協力して小中9ヵ年を見通した小中連携指導計画を作成し、実践検証をしている。

この両小学校の素晴らしい点は、児童が英語に触れる機会を多くするために、授業以外にも英語を使った日常的な活動を積極的に行っていることである。朝の読書、読み聞かせの時間ではALTが児童の発達段階に合わせた本を、クラスごとに読み聞かせている。朝の会では、健康観察や日付、天気を英語で言う練習を行っている。他教科の授業では、例えば音楽では英語の歌を歌う、理科では昆虫の名前を英語で言う、算数では簡単なたし算やひき算、円・三角形などの形を英語で言う活動を授業に取り入れている。昼休みの放送中に「英語のワンポイント・レッスン」というコーナーを設け、放送委員の児童とALTとの簡単な会話や英語クイズを放送している。

南三原小学校と和田小学校は児童の発達段階を考慮した系統的なカリキュラムを作成し、それに基づく指導を行うことによりコミュニケーション能力の素地を養うことに成果を上げている。しかし、英語活動が成功しているもう一つの理由は、日常活動において英語活動の時間以外にも児童が英語に慣れ親しむことができる工夫を先生方がしているからである。私は両小学校を訪れるたびに先生方の努力に頭が下がる思いである。



ALTと学級担任による絵本の読み聞かせ

若者に育つ「グローバルなまなざし」

目白大学 河野 秀樹



Pacific Universityでの日本語講座の授業

2009年9月、米国の2大学を訪問した。私の所属する日本語学科で行っている学生の短期研修の受け入れ先を開拓すべく、視察を兼ねて伺ったものである。米国での授業を拝見し、色々と考えさせられることがあった。

最初に訪れたのはオレゴン州Portlandから車で約一時間のForest Grove市にあるPacific Universityである。周りを森と牧草地で囲まれた学生数約3000人のこの大学には、初級から上級までの日本語8講座に加え、日本語専攻のプログラムまである。元々オレゴン州の日本語教育熱は高く、小学校からImmersion Programと銘打った日本語の集中教育を行っている。和気藹々とした雰囲気の中にも真剣に日本語の授業に取り組む学生の姿を見て、我々日本人も彼らの熱意が報われるだけの民度とホスピタリティを持つ必要があると感じた。

続いてハワイ州ホノルル市のKapiolani Community Collegeにお邪魔した。この学校は、州立ハワイ大学の短期大学部で、様々な国からの留学生が学ぶ、まさに多文化キャンパスである。日本人も多いが、彼らとその語学力はともかく、localや他の留学生と対等に堂々と授業に参加している様子が印象的だった。参観したのはLinda 藤川先生の担当するInternational Cafeという授業で、学生たちは地域に出かけ、ボランティア等の体験を共有しながら互いの理解を深めていくというもの。初回にもかかわらず、それぞれが役割意識を明確に持ち、生き生きと授業に参加している、その積極的な姿勢に圧倒された。

異文化間コミュニケーションを教える教員は、その難しさを説くことを飯の種にしがちである。そうした自分を反省させられたとともに、柔軟性を身につけた若い世代に異文化との交流の機会を持たせることの意義を改めて強く感じた旅であった。

「英語ノート」より「多言語ノート」は いかがでしょうか？

奈良教育大学 吉村 雅仁

新政府が進めている行政刷新会議グループによる2010年度予算事業仕分け作業において、「学校ICT活用推進事業」及び「英語教育改革総合プラン」が廃止と判定された。最終的な結論は出ていないものの、学校側の混乱は避けられないであろう。平成23年の指導要領全面実施に先行して小学校で既に行われている原則英語の外国語活動の多くが、教材となる英語ノート配布を含めた当該事業を前提として動いているからである。

「国際理解教育の一環としての外国語活動」の実践研究を進めてきた者としては、「仕分け人」の今回の判定が、小学校外国語活動のあり方をもう一度見直す刺激となれば良いと思う。早期英語教育にこだわる社会的な要請も理解できるが、教材としての英語ノートはもちろん、原則英語の外国語活動では、言語習得、国際理解教育のいずれの観点から考えても、期待されるような成果につながらないのではないか。

確かに、英語ノートには、中国語、韓国・朝鮮語、ロシア語、スワヒリ語などの挨拶や、様々な文字、衣装、食事、世界遺産など多様な言語的・文化的要素も含まれており、国際理解教育に資するようにも思われる。しかし、あくまでも中心は英語の歌やゲームであり、これに英語母語話者のALTが加わって授業を行えば、結局英語や英語圏文化が特別だという意識を強化する可能性が高い。

過去、ゼミ生や院生と共に、アジアからの留学生をALTとし、多様な言語や文化的要素の紹介も含んだ一連の英語活動を展開したことがある。英語ノートの内容とほぼ同じである。モンゴル語、中国語、インドネシア語などの要素を盛り込みながら、多言語・多文化への興味育成を図ったが、効果は極めて限定的であった。その後、いくつかの言語を同等に扱う多言語活動を展開し、初めて期待した効果が得られたことから、英語活動の限界と多言語活動の可能性とが見えてきたのである。いっそ「多言語ノート」を作るのはいかがであろうか。

(付記：本稿は2009年11月に投稿頂いた。)



第三回博報「ことばと教育」研究助成をうけて作成した小学校多言語活動のためのDVD素材集—これを使って多言語ノートを開発できないかと考えている。

学園18年の歩みと再出発に向けて

千里国際学園 野島 大輔



ワールド・オーダー・スタディーズにチャレンジ！
〔「平和学入門」の授業風景より〕

一つの校舎にインターナショナル・スクールと一条校が同居する学園に、開設時から勤めてはや18年余が経ちました。2000年大会では、下町の定時制校という“下からの国際化”の教育現場出身ゆえの戸惑いも交えつつ、「学校の国際統合」の経過報告を致しましたが、本欄の機会を頂戴しましたので、一教員の立場でその後を更に振り返らせて頂きたいと思います。

一条校の側から見た2校合同の教育の成果としては、度々の「分離」の危機を乗り越え、音・美・体などの合同授業が維持されてきたこと、スポーツや芸術などの国際交流の行事や一部のIB科目への生徒たちの参加が実現したことなどが挙げられます。部分でなく総体として「一括・直輸入」された、インター校の経験主義の教育に根ざした環境や指導技術の実物に間近に倣いながら、討論・発表・リサーチの学習が重視されるなどの影響も見られました。

一方、反省点は、学期完結3期制の導入前の制度的な枠組みが確立しない時代に、周辺的な作業にあまりにも労力を奪われすぎたことです。その間に国際教育の先端理論や情報が現場へどのように還元されていたか、特に本学会でも創設期から重要な役割を担ってきた藤澤初代校長が退職して以降は心許ない処です。また、その中で理論研究の裏づけが少ない時代から模索的に進められた学習・生活指導の痕をどう補正していくか、いくつかの大きな問題を生んだ学校組織をどう統御し直すかも主要な課題です。何より一条校内のIB課程の設置が実現し始め、少なくとも理論上は「古」くなった「新」国際学校の、スクール・アイデンティティの再構築は急務です。

来年度からの関西学院への統合を控え、いま学園の再出発への準備が進められています。筆者は、紛争解決学習と世界秩序の学習をミックスしたポスト冷戦対応型の平和教育の実践と、一条校の実情になじむ形での「知識の理論」の授業化に取り組んでいるところです。

お知らせ -これからの行事／イベント案内-

国立民族学博物館・日本国際理解教育学会共催 「博学連携教員研修ワークショップ2010 in みんなく」のお知らせ

「学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする—」をテーマに、国立民族学博物館を活用した国際理解の実践事例の紹介や、ワークショップを通して国際理解教育にける博学連携の意義や可能性について考えます。〈第1部〉は講演、アウトリーチ教材「みんなく」の活用事例の紹介と民博文化人類学研究者によるミュージアムツアー、〈第2部〉はテーマにわかれてのワークショップと振り返りです。

このワークショップも今年で6年目を迎え、毎年全国から100名を超える多くの方が参加して下さいます。去年は、これまでの5年間の成果を『学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする—』（明石書店）としてまとめました。今年も新しい企画でみなさんのご参加をお待ちしています。

また、ワークショップに参加して下さいました方で、今年のワークショップで分科会を担当してみたいと考えている方はお申し出下さい。大歓迎です。

<記>

日 時：2010年8月5日（木）10：20～16：30

場 所：国立民族学博物館 セミナー室および展示場（大阪府吹田市千里万博公園10-1）

お問い合わせ：森茂 岳雄（morimo@tamacc.chuo-u.ac.jp）・中山 京子

公文国際奨学財団 夏期海外研修のお知らせ

公文国際奨学財団からの助成を得て、これまで本学会会員の中学校・高等学校教員を対象とした夏期海外研修を実施してきました。2009年度は、2名の先生方がヨーロッパで研修されました。

2010年度、公文国際奨学財団の公益財団法人化に伴い、この中学校・高等学校教員の夏期海外研修が、本学会会員に限らず広く公募する制度に変更されます。4月以降に募集要項が公表されます。ぜひご応募下さい。ご応募される方は、公文国際奨学財団に募集要項・応募用紙を請求して下さいますようお願いいたします。

お問い合わせ：公文国際奨学財団 TEL 03-3234-3189（東京都千代田区五番町3-1 五番町グランドビル内）

担当者：牧野 茂（公文国際奨学財団事務局長）

理事選挙の結果報告

2009年11月1日に、本学会の理事選挙の開票作業をいたしました。その結果、以下12名の会員が、理事（任期は2010年から2012年までの3年間）に選ばれましたので、報告いたします。

宇土 泰寛、大津 和子、田尻 信壹、多田 孝志、田淵 五十生、永田 佳之、中山 京子、藤原 孝章、嶺井 明子、森茂 岳雄、山西 優二、渡部 淳（五十音順）

この12名の理事以外に会長推薦理事が数名加えられ、2010年7月の総会の承認を経て新しい理事が決定いたします。

学会ホームページのご案内

研究大会やワークショップなどの情報をご覧いただけます。アドレスは下のとおりです。

<http://www.kokusairikai.com/>

事務局通信

新入会員

以下の14名の方が平成21年12月12日までに入会を承認されました。

氏名	所属	氏名	所属
高田 小百合	聖心女子大学大学院	田中 孝治	恵庭市立若草小学校
姫田 和明	MMP	赤池 千春	早稲田大学大学院
山中 浅子	大阪市立住吉中学校	清水 大格	平塚市立松原小学校
平藤 喜久子	国学院大学日本文化研究所	石川 照子	兵庫県立西宮高等学校
木林 祥子	日本福祉大学大学院国際社会開発研究科	大畑 京子	静岡県立金谷高等学校
平田 一恵	同志社大学同志社国際学院設置準備室	小澤 由香	財団法人ユネスコ・アジア文化センター
金田 修治	大阪府立三島高校	竹川 亜希	私立愛徳学園中学校・高等学校

寄贈図書

- 上別府隆男『アジア・太平洋地域における大学間交流等の拡大』（平成20年度文部科学省先導的・革新的大学改革推進委託事業最終報告書）2009年
- 西村美智子『平和をつむぐ12歳のメッセージ-地球時代を生きる学力-』フリーダム、2009年

事務局から

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の係られました文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する機関での紀要等がございましたら、学会にご寄贈ください。その際、助成金を頂いております公文国際奨学財団にも送らせていただきますので、2部お送りください。

◆年会費納入のお願い

当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いくださいますようお願いいたします。

会費：正会員：8,000円 学生会員：4,000円 団体会員：30,000円

<郵便振り込み>口座番号 00120-5-601555 加入者名 日本国際理解教育学会

◆住所・所属等変更連絡について

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。所属変更による引越しなどで住所・所属・会員種等に変更がありましたら事務局までお知らせください。

◆紀要『国際理解教育』の購入手続きについて

現在、第1号を除き、最新の第13号までの在庫がございますが、在庫が僅少の号も出始めております。学会ホームページにバックナンバーの総目次が掲載されています。ご希望の号数および冊数をファックスまたはEメールで事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。なお、会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

◆ニューズレター編集担当より

今号をもって、私のニューズレター編集が終了します。31号（2007年秋）から今（36）号（2010年春）までの6回を担当させて頂きました。それまでお願いしていた印刷会社が廃業したこともあり、31号は新たなコンセプトと新しい印刷会社をお願いしての「ゼロ」からのスタートでした。ここに無事に担当を終えることができましたのは、会員の皆様のご協力とご支援があったからです。また、印刷をお願いしました松屋印刷様には、細かなお願いにも快く対応して頂き、感謝申し上げます。（T）